

別記様式第6

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)	氏 名	中村 不二夫										
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当												
論 文 題 目 Unveilling 'Rare' Usages in the History of English (英語の歴史における「稀有な」語法の隠れた真実)													
論文審査担当者 <table border="0"> <tr> <td>主 査</td> <td>教授 地 村 彰 之</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教授 今 林 修</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教授 吉 中 孝 志</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教育学研究科 教授 中 尾 佳 行</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>山口大学 名誉教授 和 田 章</td> </tr> </table>				主 査	教授 地 村 彰 之	審査委員	教授 今 林 修	審査委員	教授 吉 中 孝 志	審査委員	教育学研究科 教授 中 尾 佳 行	審査委員	山口大学 名誉教授 和 田 章
主 査	教授 地 村 彰 之												
審査委員	教授 今 林 修												
審査委員	教授 吉 中 孝 志												
審査委員	教育学研究科 教授 中 尾 佳 行												
審査委員	山口大学 名誉教授 和 田 章												
[論文審査の要旨] <p>本論文は、1500年から1900年に書かれた出版を意図されていない個人の日記と私的な書簡史料を分析し、文法、形態、語彙の歴史を正すことを目的としている。特に、稀有であると信じられてきた語法の中には、実際には稀有とはいえない語法があることを指摘している。</p> <p>第1章は、本論文の概説である。未踏の日記・書簡史料を分析すれば、21世紀初期においてさえ、主として文学作品の言語研究に依拠してきた従来の研究を補完する形で史実の修正に貢献できると論じる。</p> <p>第2章から第6章では、英語史において稀有であると信じられてきた語法が詳述される。</p> <p>第2章において、3人称単数現在(3SG)の <i>don't</i> の語法が、いつ頃どのような過程を経て <i>he doesn't know</i> へ移行したかが明らかにされる。3SG <i>don't</i> は、19世紀後半の50年間に <i>doesn't</i> に取って代わられた。それまでは、<i>vulgar</i> ではない英語においてさえ普通に用いられ、教育を受けた書き手も使っていた。この構造には、主語は人称代名詞が多く、文の種類は平叙文に偏っている。19世紀中頃に <i>doesn't</i> が一般化するに伴い、3SG <i>don't</i> は俗語レベルの語法として烙印を押され始め、20世紀初頭には非標準の、あるいは会話調の語法として使われる。一方アメリカ英語では、20世紀後半にようやく <i>doesn't</i> が一般化した。主要な移住の時期に、イギリス英語で <i>doesn't</i> の使用がまだ稀だったためであると考察している。</p> <p>第3章は、有性の主語が先行する能動受動進行形の歴史を扱う。用例収集が行われた結果、1600年頃から受動進行形が確立する1820年から1850年頃にかけて、先行研究によって発見されているよりも多くの書き手によってこの語法が使用されていたこと、教育を受けた書き手によっても使用されていたこと、さまざまな動詞が使われていたことを明らかにしている。</p> <p>第4章では、現在分詞の進行形の歴史が明らかにされている。中英語に登場したとされるこの語法は、先行研究にあっては、二重の <i>ing</i> 形のぎこちなさのために、英語史の中で極めて稀であったと考えられている。しかし、主に進行中の動作、取り決めや計画をあらわすために、17世紀から19世紀の日記・書簡史料で使われ続けたことを実証的に論述している。</p> <p>第5章は、「～のふりをする」の意味をあらわす動詞 <i>seem</i> の歴史が解明されている。この用法は、Shakespeare の劇作品に7例、19世紀末のMan島の方言に1例確認されている。この事実は、近代英語期の存続の可能性を示唆している。実際、調査により、その存続は紛れもない事実であった。用例の</p>													

書き手は Pepys が突出しているが、第 4 代 Chesterfield 伯爵 や Rev. W. B. Stevens も使用している。この語法は 17 世紀から 18 世紀の文法の一部だった可能性がある。本章は, seem の派生語が「ふりをする」の意味を有する謎を解くだけでなく, アメリカ英語に本用法が存続している事実をも説明する。Elizabeth 朝時代に使われていたこの語法が新大陸に持ち込まれたと考えられる。

第 6 章は, 否定辞 not が後続する現在分詞・動名詞の語法の歴史が扱われている。この語法は, 現代においても歴史的にも稀であるといわれているが, 日記・書簡史料 130 冊, 10 種類の電子コーパス, OED² on CD-ROM の分析の結果, 決して稀有ではなかったことが判明した。現在分詞と動名詞の否定の歴史再考が必要であることを唱えている。

以上のように, 5 つの事例研究を通し, 稀有な語法であると信じられてきた語法が実際には稀であるとは言えないことを指摘している。英語史研究においては, 文学テキストと同様に非文学テキストも実態を把握するための貴重な文献である。本論文は, 英語史における新たな知見を得ることによって英語史実の訂正を促し, 英語史研究に一石を投じるもので, 学位論文として高く評価できる。

以上, 審査の結果, 本論文の著者は博士 (文学) の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は, 1,500 字以内とする。